

教職に関する科目「教職入門」の教授方法・内容の充実・ 改善に関する一考察

——教職課程学生の進路選択を支援する取り組みについて——

志々田まなみ*・天野かおり**

はじめに

平成18年7月に出された中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」では教職課程の抱えるさまざまな問題が指摘されたが、現行の教員養成制度の根源をゆるがす課題の一つが、「教員免許状が保証する資質能力と、現在の学校教育や社会が教員に求める資質能力との間に乖離が生じてきている」¹⁾点であろう。答申では、(1) 専門職業人としての教員を養成する目的のもとで教職課程が設置されていないこと、そのために(2) 実際の科目の設定に当たり教育職員免許法に定める趣旨が十分理解されておらず、講義概要の作成が十分でなかったり、科目間の内容の整合性・連続性が図られていないこと、そして(3) 教職課程の組織編成やカリキュラム編成が、必ずしも十分に整備されていないことが指摘されている²⁾。

さらに、教職課程を構成する科目群のなかでも、「教職に関する科目」に向けられた批判は強い。もともと「教職に関する科目」は、教科等に関係なく、同一校種等(幼稚園、小学校、中学校、高等学校、養護教諭、栄養教諭)に共通した必修科目として設定されている。教科の基盤となっている学問領域の学術的な体系をもとに設定される「教科に関する科目」と異なり、「教職に関する科目」は教育学、心理学、社会学などさまざまな学問分野、実践領域に跨がる内

容を含んでいる。しかも、公教育の直接の担い手である教員としての使命感や職業倫理観、責任感の形成や、子どもへの深い教育的愛情を支える人間性の成熟、あるいは効果的なパフォーマンスを演じる力や創造性、コミュニケーション・スキルといった実践的な指導力の向上など、育成すべきとされている資質力量も多岐に及ぶ。そうした科目の性質上、「教職生活の全体を通じて、教員として最小限必要な資質能力」³⁾を見極めようにも、科目の内容や方法、その評価規準を整えることは容易なことではない。そのため、中央教育審議会が「教職課程の認定の際には厳正な審査を行っているものの、近年、教員として必要な資質能力を責任を持って育成しているとは必ずしも言いがたい教職課程」⁴⁾が増加していると苦言を呈しているように、多くの教職課程において「教職に関する科目」の質的確保は大きな課題となっている。こうした批判は、単に各大学の教職課程に向けられるだけでなく、「教員免許状がいわば“希望すれば、容易に取得できる資格”とみなされ、社会的に評価が低下」⁵⁾するといった事象を招くだけに、「教職に関する科目」の充実・改善はわが国の教育改革にとって喫緊の課題といえよう。

もう一点「教職に関する科目」をめぐる問題点としては、これら科目群で形成される資質力量の内実は、学生のパーソナリティ特性やそれまでの教育経験・生活体験の差異に左右される部分が大きく、習得までの速度や達成の度合いも大きく異なる点である⁶⁾。こうした資質力量の

* 広島経済大学経済学部准教授

** 尚絅大学文化言語学部准教授

習得の格差は、授業における学習活動だけでは補いきれない場合も多い。指導する大学教員の立場からすれば、日々の講義や学習が、教職に対する適性や意欲を自己省察する契機となることを期待しているが、大学内の授業だけではこうした機会に繋がらない場合も多い。かつては、教育実習をはじめとする教育現場を体験することで学生がみずから教職に対する適性や意欲を見極めることが期待⁷⁾された時代もあった。また実際、学生が自己理解、進路決定していく上で有効な活動であること⁸⁾を示す調査結果も多い。しかし、近年「実習公害」という言葉に示唆されるように、年間約10万人⁹⁾(平成21年度)もの教育実習生ひとりひとりに進路選択の猶予を与え、その教育指導を担う余裕は、学校現場にはない。そもそも、教職を志望する学生の進路選択という重要な局面での指導を、大学外での教育機会に期待すること自体、大学での教員養成というわが国の教員養成制度の原則を無視しているといわざるをえない。

そこで本論は、教育実習に参加する以前、しかも教職課程の比較的早い段階から、教職を志望する学生が資質能力の成長を自ら確認し、その結果を進路選択に活用する取り組みについて考察することを目的とする。具体的には、広島経済大学で開講している「教職入門」の工夫を4点取り上げ、「教職に関する科目」のさらなる充実・改善について、出席カードに記された学生からの声も交えながら、検討を加える。

1. 大学での学びに不慣れな学生を意識した「教職入門ノート」の活用

広島経済大学では、教職課程に履修登録した学生が初年次に受ける講義が「教職入門」である。2年次から教職課程にエントリーする者も数名いるが、教職を志望する学生の圧倒的多数が1年の前期にこの科目から教職課程をスタートさせる。

このような大学教育の導入期であることをふまえ、教職入門の授業で用いるテキストは以下のように、ノートテイクを手助けするような構成となっている。教科書は自習を中心とした学習方法では利用しやすいが、大学1年生にはこうした習慣が身につけている者は少ない。そこで、授業内で書き込むワークシートの様式を採用し、半期分をすべて印刷・製本したものを第2回目に渡している。15回分すべての授業資料を一括して渡すことで、資料の紛失やもらい忘れなどによって予習、復習に支障がないよう工夫している。また、毎回の講義資料に加え、予習課題欄、復習課題欄を設け、毎回その内容を提出させ確認することにより、入学早期から授業時間外の学習の習慣づけをおこなうように配慮している。予習課題は、おもに講義内でおこなう意見交流やグループワークで利用する資料づくりとなっている。自らの学校教育経験をふり返らせたり、教育改革の動向を新聞等で調べて書き込ませている。意見交流やグループディスカッションなどで用いる資料を作成させることで、予習課題を準備してこないと支障が出るようにしている。

またこの「教職入門ノート」は、重要な用語は穴埋め形式で表示してあり、講義中に記入していく形式となっている。これは、90分間という長時間、集中して板書をすべて書き写すことや、それと同時に授業の要点をメモするという作業を同時並行で行うことが、多くの1年次生には難しいことに配慮している。ただし、穴埋めをさせる作業を講義内で行うと、その箇所を暗記すればよいと誤認する学生もでてくる。そうした誤解を招かぬように穴埋め箇所は極力少なくし、講義後の復習でどこがポイントだったのかをつかみ取る目印として利用するよう指導している。板書を写すことに気をとられるあまり、重要な部分や疑問点、自分の意見などを聞き取ったり、メモすることができなくなって

しまわないように、講義で板書する内容はあらかじめノートに記載している。また、資料右端にメモ用の空白部分を大きく設け、授業内で重要な点や解説のために板書した図表を書き込むよう指示している。

2. 丁寧に「書くこと」の習慣づけ

2.1 出席カード記入の指導

「教職入門」では毎回学生に「出席カード」を配布し、講義に対する質問や感想、意見があれば記入するように指示している。このカードは2つの機能を持っている。

ひとつはこのカードの名称どおり、その回の講義を出席したかを学生自身が確認するためである。かつては出席確認をしていなかったのだが、出席カードや授業アンケートの自由記述欄などをみると、出席確認をされていないことに大きな不安を感じる学生が毎年ある一定数いることに気づき、確認をするようになった。彼・彼女らの声を概観してみるとその一つは、高等学校時代のように欠席や遅刻を教員が直接注意することがない分、気が緩みやすくなり欠席してしまうのではないかという不安であることがわかる。「学生」として自分で出欠席状況を自己管理し、学習へのモチベーションを維持し続けるために、この出席カードによる自分の出欠席情報を活用するよう指導している。なお、広島経済大学ではインターネットを介し、自分の出席情報を確認できるような情報システムが整備されている。

もうひとつの不安は、「出席している努力を認めてもらえない」という不満にも似た感情である。基本的に講義に参加するのは学生として当然の行為であり、講義に出席しただけでもって成績に加点することはできないと説明しても、加点などなくてもよいから自分が出席し続けているということを教員に認めてほしいのだという要望が強い。成績評価に役立つかどうかでは

なく、無断欠席をしている学生と授業に出てきている自分との差異を示す情報がなければ、不公平だと感じているようすがうかがえる。こうした学生の感情に寄り添うことも必要であると考える、出欠席の確認を行っている。

出席カードのもうひとつの機能は、講義に関する疑問や感想、理解しにくかった点などを次の講義で紹介し、補足説明を充実させることである。学生には「あなたが抱いた疑問や感想、理解しにくいと感じた点は、おそらくほかの学生も同じように感じているはずです。こうした指摘は、講義を改善させたり充実させたりするためにとても重要です。当たり前のことですが、講義をしている側（教員）は講義を受ける側（学生）の立場にたって、講義を点検することはできないのですから、学生の皆さんにたずねるしか方法がありませんので、ご協力をお願いします。」と指示を行っている。

こうした指示を出すと「何か書かなければ出席したことにならないのですか？」と質問する学生が出てくる。90分間、集中して講義を聞き、理解しているかを確認する目的のもと、出席カードに要点や感想を書くよう指示する場合もあるが、予習課題、復習課題によって理解度の把握はできるため、この講義ではこうした意図ではカードの回収を行っていない。それゆえ、「何も意見が思い浮かばなければ白紙のまま提出してもよい」と返答するようにしている。ただし、学生が記入した内容については、無記名ではあるものの、よほど特徴的ですぐに個人特定ができてしまうような筆跡ではない限り、カードの記述欄をそのままスキャニングをし、プロジェクターで映し出すようにしている。したがって学生には、礼儀正しい言葉遣いで、他の人にもわかりやすい説明をすること、そして、大きな文字ではっきりと丁寧に記入することを求めている。その企図については丁寧に書くことへの指導とも関連するため、次節において解

説を行う。

2.2 丁寧に文章をつづる指導

デジタル文書作成が浸透している今日ではあっても、教員の職務には板書を筆頭に、児童生徒の日誌や答案への所見記入など、文章を直筆で書く機会が多く存在する。こうした日常的な作業を当たり前にこなせる訓練も、教職課程の授業には必要となる。そのため、教職入門の授業では丁寧に直筆で書くことを指導しており、提出課題についてもワープロでの作成を認めていない。また、教職入門ノートの第4回予習課題として以下のような文章¹⁰⁾を掲載している。

文字は何のために書くのですか—こう質問されたら、あなたはなんと答えますか？

十人十色の答えがあるのでしょうか、わたしなら、「誰かに何かを伝えるため」と答えます。もちろんメモや日記など自分自身のために書く文字・文章も一部ありますが、日常生活で書くという行為は、誰かに何かを伝える必要が生まれたときに行なわれるものです。

皆さんがこれまですごしてきた「学校」という場の時間は、その外の世界とくらべて圧倒的に多くの時間を、書く（ノートに写す、作文・感想文・レポート・小論文を書くなど）ことに使われています。つまり、子ども時代の多くの時間を「書く」ことに費やさねば習得はできないほど、文章を書くということは人間にとって高度な技なのです。

しかし残念なことに、そこで教えられている文章は、誰のために・何のために書くのか、あまり意識されない類のものです。しいて言うならば、ノートをとるのも、作文を書くのも、みんな自分の学習のためです。そのため、どうも学校生活のなかでは、

文字を憶え正しい文章を書くことが強調され、読む相手の気持ちを考えて書く、読みやすいように丁寧に書くということが意識されにくいように思います。

このためなのでしょう、これまでわたしが生きてきた何千枚という出席カードには、決してすべてではありませんが、この学生はいったい何を伝えたいのだろうか…と腕組みをしたくなるものが含まれています。主語がなかったり言葉が不足していて意味が通じないもの、一方的な主張が書かれており授業内容のどこに疑問を持ったのかわからないものも、あるいは、ひらがなばかりで書かれていたり文字が判読できないほど薄かったり、何かを伝えたいと思ったからこそ書いてくれたとは思いますが、それがこうした事情からつかみ取れないカードを多くみかけます。

文字を書くことはコミュニケーション方法のひとつですから、相手に伝わらなければ意味がありません。また、内容という面でも字形という面でも、丁寧に書かれていない文章は、本人にはそのつもりがなくても、相手を不快・不安な気持ちにさせたり、誤解を招いたり、不信感を抱かせてしまったりします。出席カードも、文章コミュニケーションのトレーニングだと思って、どうか丁寧に書いてみてください。先述したとおり、文章表現は高度な技術ですから、こつこつと積み重ねていくしか上達する方法はありません。教員という仕事は特に文章作成の多い仕事です。わかりやすく丁寧な表現が当たり前のようになれるようになってから、卒業してほしいと思っています。

単文でわかりやすい内容の文章を丁寧な字体ですばやく書くことは容易なことではない。文

章表現能力はもとより、丁寧に文字をつづる技術力にも個人差は大きく、それゆえ短期間で習得することは難しい。そのため4年間をかけ、大学教育の様々な場でこうした「丁寧に文章をつづる」ことを意識させるよう試みている。前節で紹介した授業カードの実物の投写も、字形が整っている例を見せるためではなく、丁寧に書こうとしている努力が見うけられる箇所を探して指摘し、小さな心遣いで相手に与える心証が変化すること実感してもらうことを企図している。

3. 適切な「言葉がけ」に関するグループワーク

3.1 よい聴き方、よい話し方に関するグループワーク

平成17年に出された中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」では、優れた教員の条件について、大きく3つの要素が重要であるとしている。第一は、教師の仕事に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感などをさす「①教職に対する強い情熱」、第二に、子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級づくりの力、学習指導・授業づくりの力、教材解釈の力などをさす「②教育の専門家としての確かな力量」、そして最後が、豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質、同僚として教職員全体と協力していくための「③総合的な人間力」である。

この第三の要素である総合的な人間力は、人間としての生き方やあり方までが全面的に関わ

れざるをえないような大きな概念である。中央教育審議会義務教育特別部会（第3回）に提出された梶田淑一委員の資料¹¹⁾「優れた教師が備えるべき資質・条件」に、「ここにあるような能力・特性は、いずれも、教職にあるものにとつての努力目標です。日常の職務にとって必要となるものであると同時に、教職にある間ずっと、さらには生涯にわたって深めていくべきものと言つてよいでしょう。総合的な人間力としての＜教育的力量＞は、つきつめて言えば、このような方向で自分自身を伸ばしていこうと努力する教師にのみ実現するものではないでしょうか。」とあるように、総合的な人間力は一生涯をかけて錬磨していかなばならない資質能力だといえよう。そこで、教職課程では、自分自身の長所・短所をよく理解することや、そこで発見された長所を伸ばし、短所を補うような努力を日々続けていく意識を形成していく必要がある。こうした対人関係能力、コミュニケーション能力に代表されるような人間力を身につけていく第一段階として、「教職入門」では、「聴き方」と「話し方」に関する自らの特徴を理解し、改善していく手がかりをつかむワークショップを行っている。

表1は、過去4年間の授業内で「あなたにとって『話したくなる相手』、『話したくなくなる相手』とはどんな相手なのか」という発問に対する学生からの回答を集計し、その回答者数が多いものから順に3つならべたもの¹²⁾である。

この表1を用いて、自分が会話の相手を「話したくなる相手」あるいは「話したくない相手」

表1 「話したくなる相手」・「話したくない相手」の特徴

話したくなる相手	話したくない相手
楽しそうに気持ちよく聴いてくれた	自分の話を聴いていない態度だった
話したいことを聴いてくれた	自分ばかり話をして、聴いてくれなかった
自分の気持ちを受け止めてくれた	自分の気持ちを否定したり、批判されたと感じた

と判断する原因となる態度やしぐさ、言葉づかいなどについて、各グループに分かれ10項目ほどにまとめさせたうえで、「良い話し方」と「良い聴き方」の両方を考え、発表しあう。そうして最後に、自分たちで抽出した良い話し方、聴き方をふまえ、自分の話し方や聴き方をふり返らせ、明日から改善すべき点、今後いっそう伸ばすべき点についてレポートを書くよう指導している。こうすることで、より具体的に自らのコミュニケーションの長所と短所をふり返り、改善にむけた意識づくりを行っている。

3.2 支持的な言葉がけのグループワーク

総合的な人間力の一つである対人関係能力の基礎としてよくとりあげられる力に、「他者への積極的関心」がある。中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（平成23年1月31日）には、「将来、自分の職業観・勤労観を獲得して、自立的に社会の中で生きていくために今から育てなければならない能力や態度」を支える「基礎的・汎用的能力」として、「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の4つの能力があげられている。この筆頭に上がっている「人間関係形成・社会形成能力」は、「他者を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝える力」や「自分の状況を受け止め、他者と協力・協働して社会に参画し社会を形成する力」で構成されており、他者とのかわりを通して、創造する喜びや自分や他者のよさに気づくこと、すなわち「他者への積極的な関心」とそれをうまく相手に伝える力の育成が重要視されている。

そこで、こうした「他者への積極的関心」を高め、また相手にそのことを伝える力を育てるグループワークとして「教職入門」の講義では、「よいところさがし」に取り組ませている。以下

は、『教職入門ノート』内のこのグループワークのための予習課題の解説文¹³⁾である。

「子どもは褒めて育てるものだ」というような話を聞いたことはありませんか？これまで随分たくさんのいわゆる子育て論を読んだり、聞いたりしてきましたが、そのほとんどがこの「子褒め」に「賛成」か「反対」（反対派は圧倒的に少数です）のどちらかに分けられるように思います。ほかに「性善」説（人間は善人で生まれてくるので温かく見守って育てればよい）と「性悪」説（人間は悪人で生まれてくるので厳しく躾ながら育てるべき）、あるいは「正の強化」論（相手が喜ぶ報酬を与えて方向付ける）と「負の強化」論（相手がつらい罰を与え方向付ける）の子育てへの応用なども、似た話題だといえるでしょう。

私としては、子どもも含め人は良いことも悪いことも両方するものですから、常にどちらか偏った立場からコミュニケーションをとろうとすることは、ひどく不自然な行為のように思えます。しかしその一方で、これほど多くの人々が「子どもを褒めなさい！」と繰り返し論じているということは、他者を褒めようとするのは難しく、意識的にトレーニングしなければなかなか相手のよいところを見つけ出すことはできないということの現れのようにも感じるのです。

そこで、みなさんには来週「よいところさがし」のトレーニングをしてもらおうと考えています。以下の文章は、A君のあまりよいとはいえない言動について書いたものです。しかしこの言動の中から、A君のよいところをたくさん見つけ出してきてください。これを使って、来週、彼の問題行動を解決するためのアドバイスを考えてもらおうと計画していますので、しっかり準

備して参加してください。

ここで取り上げる事例は、自分勝手な行動だとみえがちだが、A君の言動や様子に思いをめぐらせるとそうせざるを得なかった状況や、行動の原因として別の解釈が成り立ちそうなエピソードを用意するようにしている。予習課題として自分が用意した回答をグループ内で相互発表させ、その後意見交換を行わせている。当初はなかなかA君の行動を理解することができなかったり、彼を責める意見しか出せない学生もいるが、自分とは全く異なる意見を発表する学生に刺激されると、次第にA君のおかれている状況を想像したり、生徒の未熟な部分をサポートしなければいけないという教師としての意識に気づけるようになる。価値の多様化が進む現代社会においては、既存の状況に参画・適応しつつも、異なる価値観との摩擦に遭遇したことを契機に、自分の資質能力を見直したり、必要な場合には改善を試みることなどへとつながていける力が求められているだけに、こうした他者の気づきに刺激される授業づくりは効果があるものと考えている。

4. 「教員像」や「教育観」の涵養

4.1 読書指導と読書ノートの指導

読書習慣は、近年大学教育だけでなくあらゆる学校段階でその重要性が叫ばれており、その定着のために全国で様々な取り組みが行われている。教職課程も例外ではなく、教員が変化し続ける社会・子どもに対応するためには、常に新しい情報を収集し自己研鑽を積むことが必須であり、その情報の入手法として主要なものは読書である。そのため、教員に必要なさまざまな資質・能力のなかでも読書能力は基礎的なものの一つであり、教職課程における継続的な読書指導は課題となっている。

そこで、教職課程での読書指導のファースト

ステップとして、「教職入門」では「教員像」や「教育観」を考える際の参考となる12冊の課題図書指定し、少なくともこの中から1冊を読み、『教職入門ノート』の中に設けられた「読書ノート」に直筆で記入させ、期末課題として提出させるようにしている。「読書ノート」には①書名、②著者名、③出版社、④出版年、⑤読んだ期間、⑥感動した言葉や印象深い内容等、について記すよう指示してある。課題図書など準備せず、自らの「教員像」や「教育観」を捉え直すような書籍を自由に選ばせることも考えたが、読書経験の少ない学生も多いため、教員の側で指定することとした。

「教員像」については、平成9年に教育職員養成審議会から出された「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（第一次答申）」¹⁴⁾で指摘されているような「(1) いつの時代にも求められる資質能力」と「(2) 今後特に求められる資質能力」などについて解説する教育学の専門書も含まれているが、伝統的な聖職としての教員像を描いた文学作品や、いじめ、不登校など生徒の諸問題に苦悩する現代の教員の姿を描いた作品など、幅広いジャンルからも選んでいる。模範モデルが描きにくい現代社会の中で、自分なりの「教員像」や目指したい「教育観」を考える契機となるにふさわしい課題書籍となっているかどうかについては見直しが欠かせないため、毎年学生から提出された読書ノートを分析し、少しずつ課題書籍リストは改編を加えている。

4.2 教育を受ける権利に関する理解

「教職入門」において義務教育制度を解説する回の予習課題として、「どうして義務教育があると思いますか？あなたの意見を書いてください。」という発問を行った。すると、「子供を自由に何でも好き勝手にさせないため、きちんと勉強させるためだと思います。」(以下括弧内、

斜体で標記した文章は2012年度の学生からの回答)や「私は義務教育がなかったら勉強しない人はまったくやらないと思う」、「義務教育をなくしてしまうと、みんな学校に行かなくなり高校、大学も崩壊状態になるでしょう。そういう観点から見ると国力を維持し、他国の侵略を防ぐ為ともいえると思います」のように、子どもの義務として義務教育を捉える傾向が強い者から、「義務教育は人間が社会に出る上で最低限の知識を得るためにあるのだと思う。」や「義務教育は社会に出るまでの準備期間だと思います。社会に出ていくときに知識もなしにやっていくのは不可能に近いからと思うからです。」のように相対的には弱者まで差はみられるものの、多くの教職課程1年生は、「義務教育」が子どもにとっては「権利教育」であることを理解していない。

むしろなかには、「義務教育がないと子供を働かせる親とかでてくるから子供のうちに勉強させないといけないと思います。」や、「私は、もし義務教育が無かったら貧富の差がとても広がるのではないかと思います。親によっては、幼いうちから子供を働かせている国や地域がありますが、識字率が低く母国語さえ読み書きできないまま大人になってしまい、生活も苦しいままのようです。」といったように、貧困問題や児童就労の問題と義務教育制度とを関連づけて回答する学生もいるが、こうした学生の割合は小さいのが現実である。また、「(義務教育が存在する理由は¹⁵⁾)わかりません。登校拒否などで学校にいかない生徒がいるのに義務教育の意味があるのでしょうか?」という回答に見られるように、彼らにとって学校に通えない理由は、いじめや不登校といった問題の方が想起しやすいようである。

こうした教育観をもつ学生たちに「教育を受ける権利」を理解させることに困難を感じるものがしばしばある。教育を受けたいと渴望する

経験、教育を必要だと実感する体験が乏しい青年期の彼らに、子どもたちの教育を受ける権利を守る教員職務を解説する手立てとして、第三回目の予習として、以下のような文章を読ませ、感想を書かせる試みを行っている。

「教育」は、円滑なコミュニケーションの下でしか成り立ちません。ですから、教員には他者と円滑なコミュニケーションを築く力が強く求められます。これから4年間に渡って、みなさんはこの力を伸ばしていくわけですが、その初歩として「常にすべての人に敬意を払う」態度を自然に取れるようになることがあげられます。この敬意とは、少し難しい言葉をつかうと、相手の人権を尊重しその気持ちを表現する言動のことです。自分を大切に思うのと同じくらい相手を大切に思っている気持ちを表現できることが、相手の気持ちをほぐし心を開かせていくことができるかどうかの「鍵」なのです。

もうひとつ忘れてならないのは、敬意は、相手が自分より有能な人だから、尊敬できる人だからあるいは、好感を持てる相手だから払うものではなく、すべての人に払われるべきものということです。あなたが事故に遭遇したとき、たとえそれがあなたに原因があったとしても、警察や消防で働く職員は危険を顧みず助けに駆けつけてくれます。それは、警察や消防という仕事で、すべての人間が生まれながらに持っている社会的な権利(=人権:幸福・自由・平等などの下で生存しつづける権利)を守る仕事だからです。教員も、すべての人が教育を受ける権利(=教育権:人権の一つ)を守るという意味で同じであり、どんな状況下においてもどんな相手にも常に敬意を払い、その人の成長を支えていく使命を持つ

ています。

では、この「敬意」を払える力を伸ばしていくためには、大学生活でどのようなことに心がけたり、何をしていかなければならないのでしょうか。じっくり考えてみてください。

教育を受ける権利については、人間が知識を学ぶことを通じて成長、発達していくことを支援する営みであるという個人的要因と、有意な人材によって社会の発展を維持するという社会的要因の双方で構成されているだけに、教員にはその両者のバランスを考えた教育観を主体的に形成していく必要がある。こうした教育観を築かせるためにも、教育を受ける権利に関する理解を促す工夫は今後も続けていく必要があると考えている。

まとめにかえて―教員としての適正を考える― ―教職履修カルテの授業内活用―

教育職員免許法施行規則改正に伴い、2010年度新入生より教職課程履修開始時より「履修カルテ」を作成し、これを活用しながら、4年次で履修する「教職実践演習」においてこれまでの学びをふり返り、改めて教員としての自らの適性を考察することが義務づけられた。これにより、「教職課程の他の科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認する」¹⁶⁾ ポートフォリオによる評価方法が教職課程に導入されることとなった。このポートフォリオとは、学習者のふり返りによって自らの学習成果を自己評価することと、大きな目標達成のプロセスのなかで今の学習がどこに位置づくものなのかを確認することを通じ、自分の学習活動を管理す

るためのメタ認知を育てることを意図するものである。

ただし、こうしたポートフォリオによる学習評価をめぐっては、いくつか課題もある。なかでも、学習者の自己評価の力が弱いままでは上述のような評価による学習効果は期待しにくい。ため、自己の現状を客観的に判断したり、自らの学習意欲や学習動機と結び付けられる力、いわゆる「自己評価力」をいかに準備させるかは、早急に対応しなければならない課題といえよう。従来の学校教育では教員による評価＝他者評価が主体であるため学生たちは不慣れなだけに、自己評価力の意味やその学習上の意義を教職課程の早い段階、すなわち「教職入門」の中で理解させておくことが求められる。その試みの一つとして、「教職入門」の中間試験、期末試験の実施後は学生に採点した答案を必ず確認させ、その試験結果に関する自己評価活動を講義時間内で行わせている（答案はその後回収する）。その際、単に“できたか・できなかったか”ではなく、日々の講義への取り組みや予習・復習、試験勉強と、試験結果との関連性をふり返り、文章にまとめたものを提出させている。また、次の試験や、次の教職科目履修に向けた方針や心構えについても記述するよう指導している。それらの作業を積み重ね、習慣化させるだけでなく、その結果をもとに学生一人ひとりに個人指導を行っていく必要もあるだろう。こうした「履修カルテ」を用いたポートフォリオ評価のフォローアップ指導の方法・課題については、今後の課題としたい。

注

- 1) 中央教育審議会「教員養成・免許制度の現状と課題」『今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）』2006年7月。
- 2) 同上
- 3) 同上
- 4) 同上
- 5) 同上

- 6) 藤原正光・仙崎武「教職志望学生の進路形成(1):教育学部大学生の教職志望動機と教職観」日本進路指導学会編『進路指導研究』第5巻, pp. 1-5, 1985年。
- 7) 鈴木慎一・仙崎武(編)「『実習』とは何か—教育実習の意義と性格—」『教職課程講座』第8巻, ぎょうせい, pp. 2-18, 1990年。
- 8) 長岡大・松井賢二・山田亮「大学生の進路選択に対する自己効力と進路(キャリア)成熟—教育実習前後の比較を通して—」日本進路指導学会編『進路指導研究』第20巻, pp. 11-20, 2001年。
- 9) 文部科学省教職員課「教員免許状の授与状況(2)」文部科学省編『教育委員会月報』第63巻3号, p. 32, 2011年6月。(実数は103,404人, 教職課程認定大学卒業者の17.1%を占める)
- 10) 志々田まなみ「文字は何のために書くのでしょうか」『教職入門ノート』p. 12, 2011年。
- 11) 中央教育審議会義務教育特別部会(第3回) 配付資料(平成17年3月23日)梶田委員提出資料「優れた教師が備えるべき資質・条件」文部科学省HP
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo6/gijiroku/05032401/teisyutu002.htm
(2012年6月30日確認)
- 12) 志々田まなみ「聴く力・話す力」を鍛える1」『教職入門ノート』p. 15, 2011年。
- 13) 同上, p. 18。
- 14) 教育職員養成審議会「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について(第一次答申)」(平成9年7月28日)
- 15) 筆者による補足。
- 16) 中央教育審議会, 前掲答申。